専門職は、まずは自らを検証し続ける勇気が必要

保育士等の専門職養成校の教壇に立つ身にとって、先週気になる報道記事に接した。
病院内保育所で２０数年に渡り保育士による虐待が行われていたようで、保護者からの訴えで病院側が隠しカメラを設置してその実態が明らかになり、５人の内３人の保育士が虐待を認めたという報道。

往々にして職場内保育所の園長は設置職場の管理職が兼務する所が多いだけに、日頃常勤しないという設置背景等の問題もあるが、それはさておき、長年に渡り保育士による虐待まがいが日常化していたのは、言語同断である。

「しつけのため」といい訳しているようだが、「しつけ」とは「しつけ糸」が語源であり、いつか外さなくてはならないことを念頭において、子どもの生きる力を育もうとしていたのか、甚だ疑問に思う。

もちろん、虐待した保育士たちは何をか云わんであるが、他の保育士も虐待の通告義務のある職種だけに同僚の虐待に目を覆おっていたことは同罪と思う。
職場内でシカトされるとか、職場を失うとか、長い物には巻かれると云った保身優先では、子どもを守れない。

ある学生から、自身は幼い時で記憶にないそうだが保育所でのストレスからか円形脱毛症、嘔吐や下痢しがちであったが、危惧した母親が転職までして保育所を変えたら症状が改善したという母親からの話を聞かせてくれたことがある。

こうした専門職による実態があるだけに、各学校の最初の授業で「専門職の資格を取ることは易しい。専門職であり続けることは難しい。」と話す。
また、「資格を取ることはあくまで手段。資格を取って子どもや当事者をどうしたいの？」と問いかけ、「それを考えるヒントを授業で提供する。自ら思索し続けるように！」と話している。

保育士に限らず、「人間相手（ 教育、保育、療育、等々）の仕事にはゴールはない。係わるだけでなく、係わり合い続けること。知識と技術に裏打ちされた知恵をいかに働かせるかのチャレンジ精神と、自らを検証し続ける勇気が必要。それがこれら仕事に携わるプロとして必要な資質」と、数々の事例紹介の横道に逸れながらも全授業日を通して語りかけているつもりである。

プロだからといって自らを検証し続ける姿勢が身に付く、身に付いているとは限らないから、日常生活の中でも自らを検証し行動する勇気の大事さを、授業以外でも機会あるごとに語りかけている。

阿部幸泰　　（2007 年 11 月 10 日　記）